



論文

「移動する子ども」をめぐる研究主題とは何か

複数言語環境で成長する子どもと親の記憶と語りから

川上 郁雄*

■要旨

本稿は、「複数言語環境で成長する子ども」を「移動が常態である」という視点から捉えることを試みる。タイで生まれ成長した子どもとその母親の語りを事例として、「移動とことば」をめぐる主観的な意味世界を探究することがこれらの子どもの中心的な研究主題となることを主張する。

© 2017. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

■キーワード

移動する子ども
複数言語環境
複言語複文化能力
継承日本語教育
移動とことば

1. 「移動が常態である」という視点

子どもが複数言語環境で成長することは、現在、世界中で起こっているありふれた現象であり、決して珍しいことではない。複数言語環境で成長した子どもが社会のあらゆるところで活躍していることも知られてきた。また社会に見られる多言語化や家族内の複数言語使用、移動にともなう複数言語接触など、子どもの成長の背景にグローバルな社会状況と多様な言語コミュニケーションの実態が関連していることも、多くの研究が明らかにしている。

本稿は、複数言語環境において成長する子どもが複言語複文化能力を持ちどのように生きていくかを探究することが、これらの子どもの教育実践の中心的な研究主題となるという立場で論を進める。ただし、「複数言語環境で成長する子ども」という現象を、私たちがどのような視点で捉えるかによっては、研究の方向性が大きく異なるだろう。本稿の出発点も、この点にある。少し具体的に言おう。

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

人の生は、けっして真空の中で個別に起こるわけではない。子どもは、成長していく過程において、身の周りの人々や社会について、あるいは使用することばや生活の仕方などについて子どもなりに理解し、認識し、その中で自らがどのように生きていくかについて考えながら生きていくだろう。その際、子どもの生は社会や他者との動的な関係性の中にあると捉えられる。そのような人のあり方、生のあり方は、子どもが生まれたときからあらかじめ方向性が決められている訳ではなく、子どもは様々な可能性と制限の中で揺れながら成長していく。また、その動態性の中には、子どもだけではなく、その子どもの親や支援者も同様に含まれていく¹。

人類学者のJ. クリフォードは、かつて、「だれもが、いま、移動している (Everyone's on the move)」, 「旅のなかに住まう (dwelling-in-travel)」と述べ、そのため、人間の生活や視点、発想や認識が「転地 (displacement) によって構築されている。」と指摘した (Clifford, 1997[2002])。これは、「定住」を常態と見るのではなく、「移動」を常態とする視点だ²。さらに、クリフォードは、「転地」という実践が、「たんなる場所の移動や拡張ではなく、むしろ多様な文化的な意味を構成するもの」という、豊かな実践と考えられると主張した (Clifford, 1997[2002])。そう考えると、複数言語環境で成長する子どもを、ひとつの言語、ひとつの社会の定住者の視点から見ることに限界があることがわかる。これらの子どもの生は、モノリナルな視点から見ただけでは捉えきれない「豊かな実践」と見ることができるのではないだろうか。

本稿は、「複数言語環境で成長する子ども」を「移動が常態である」という視点から捉えることを試みる。まずこれまでの「複数言語環境で成長する子ども」の研究がどのような視点で行われてきたのかを振り返り、その限界と問題性を指摘する。その上で、問題性を乗り越える研究視座を設定し、調査概要と二つの事例を述べる。最後に、新たな研究主題のあり方を検討するという順で、論を進める。

2. 「複数言語環境の子ども」をめぐる研究のレビューと課題

日本における複数言語環境の子どもに関する研究はこの20年間、多岐に行われてきた³。たとえば、「海外・帰国子女教育」から出発した異文化間教育の過去の研究は、子どもたちの「言語・文化習得」「アイデンティティ形成」「教育支援 (教育戦略)」という三つの研究主題に収斂すると述

1 詳しくは、川上 (2011) 参照。

2 伊豫谷 (2007) は「安定した一定の領域、固定した場を正常な位置として想定し、移動する人を例外として観察してきた」とこれまでの移民研究を痛烈に批判した。

3 日本語教育における、これまでの複数言語環境の子どもの研究主題は、(1) 言語教育実践 (教材、教授法、実践方法、学習内容、学習成果、評価法等) が圧倒的に多い。他に、(2) 子どもの学習・生活環境 (異文化適応、人間関係作り、教員研修、地域、家庭、政策等)、さらに(3) 子どもの能力と成長 (学力、言語能力、アイデンティティ、ライフコース等) がある。研究方法はテスト結果の分析、アンケート調査などの量的調査や、個別実践や結果の分析、インタビュー調査などの質的調査が行われてきた。

べられている（小島・白土・齋藤編，2016）。また，それらの研究で使用される視点は，「適応」「成長」「文化化」「子どもの属性」，「発話コードの切り替え」から「二文化混合」，近年では「ハイブリディティ」「トランスナショナリズム」「新しい日本人性」などがある。

しかし，これらの研究の子どもの「移動」は，点と点を結ぶ空間的移動を前提としたものであり，「移動した結果」としての子どもを対象化する道具立てだった。その後，展開される「外国人児童生徒」の日本語教育も，日本国内に定住・適応するための実践研究という発想が主流であったし，日本国外でも日本語を学ぶ継承日本語教育研究は日本を定点とした実践が主流だった。つまり，これらの研究で説明される「移動」は，一方向性からの物理的な「移動」と捉えられ，「移動」という行為自体が研究対象化されなかった。

では，どうしてこのような「移動」の捉え方になるのか。それは，日本という国に住んでいる，子どもを取り囲む大人たちの視点が定住者側からの捉え方であったからである。そのため，複数言語環境にあり，動態性のある，子どもの生の一部しか捉えられず，結果として研究主題が限定されていくことになる。

ここで考えたいのは，固定的な定住者の発想による研究ではわからない，子どもの生のあり様である。これまでも，高校生や大学生，補習校で学んだ青年へのライフストーリー研究や，子どもを複数言語環境で育てる親へのインタビュー調査から，子どもや親の主観的な意識に注目した優れた研究があった（谷口，2013；太田，2012等）。

ただし，これらの先行研究は，必ずしも，「移動」に関する総合的な考察があるわけではない。つまり，複数言語環境の子どもの研究において，「移動が常態である」という視点をどう築くのかという点はまだ未開拓なのである。そして，その視点に立つことで見えてくる課題は何か，それを今後どう研究していくのかという点は極めて重要なテーマになると考える。したがって，本稿の目的は，その「移動」という行為を「豊かな実践」と捉える視点から，複数言語環境の子どもの生を捉えるための方法と，そのことから見える研究主題のあり方を考えることにある。

3. 調査の概要と研究方法

以上の問題意識から，本稿で取り上げる研究方法と調査の概要を記す。本稿のもととなる調査は2016年3月にタイのある都市で行われた。英語が公用語となっていない非英語圏の国で，かつ，学校では英語が外国語となり，ローカルな空間では現地語が中心となる国で，親子がどのように暮らすのかを見ることが，この研究主題に必要と考えた。

この調査の調査協力者は，タイ人の男性と結婚した日本人女性4名と，タイ生まれのその子ども4人である。子どもの年齢は19歳から23歳。その内訳は，男：3名，女：1名であった。これらの青年たちと母親に個別に，一人1時間半ほどの日本語による半構造化インタビューを行った。その内容を録音し，文字起こししたのち，幼少期より「移動とことば」を中心に「語り」を

整理した。その際、「移動する子ども」という分析概念に含まれる①空間的移動、②言語間移動、③言語教育カテゴリー間（言語学習場面間）移動（川上，2011）の観点を使用した。これらの観点は、子どもの語りの分析にも有効だが、子育てをする親の語りの分析にも有効と考えられるからである。そして、これらの三つの観点を貫く「移動とことば」の視点から最終的に子どもの生についての考察を試みる。最後に、「移動とことば」に関わる主観的な思いや考え（意味世界）から、「複数言語環境で成長する子ども」の研究主題とは何かを論じる。本稿では、インタビューにおいて、十分に語りが収集できた2組の母子の「語り」をもとに考察を行う。

ここでいう「移動」と「ことば」⁴は、密接に関連しており、切り離せない。記述にあたっては、「移動が常態である」という視点を研究に取り入れるためには、分析者の視点を母と子の語りの動態性の中に置くという方法で進める。

4. 事例(1) Eさんと息子のSさん、Kさん

Eさんは1993年に日本からタイへ移住した。夫は中国からタイへ移住した家族のもとタイで生まれた人である。Eさんは、日本の教員養成系大学の学生の時に英語を学ぶために1年間アメリカへ留学し、そこで同じくタイからアメリカへ留学していた現在の夫と出会ったという。その時の二人の共通語は英語であった。Eさんは、日本では中学校の英語教師をしていたが、結婚を機に、教員を辞めてタイに住むようになったという。

Eさんには双子の息子（Sさん、Kさん）がいる。大学の工学部の1年生である。

4. 1 子育てと幼少期

〈母親Eさんの語り〉

Eさんは、タイに移住後、タイ語の語学学校へ1年間通い、タイ語を覚え、日系企業で働くようになった。Eさんはタイ語がわかるようになってから子どもを産もうと思っていた。その理由は、タイ語がわからないと親として学校のこともわからず、先生とも話ができないのは嫌だと思ったからだという。そして、タイ語がわかるようになって1996年に双子の息子を出産する。夫は、夫の親が話す中国語は聞いてわかる程度で、中国語を話すことはなかった。また、夫が子どもの教育に口を出すことはなかった。

そのような中、Eさんは子育ての時のことばについて次のようにいう。

「私は日本語しか使わない、夫にはタイ語しか話さないでちょうだいと言って。私は、母国語でない言葉を中途半端に使うのはよくないとすごく思っていて、私は、タイ語もわかるし英語もできるんですが、じゃ、それで子どもを育てましようとはぜんぜん

4 本稿の「ことば」は複言語複文化能力の現出したものとして捉える。

思わなかった。」

Eさんは、出産後はマンション住まいだったため、閉鎖的な空間で過ごし、外出する機会も少なく、ほとんど家にいた。テレビはNHKを見ていたので、日中は日本語だけの生活だった。夫が帰宅すると、夫とはタイ語を話したが、子どもがタイ語に触れるのはそれだけだった。そのため、子どもが日本語やタイ語を話すのは遅かったという。しかし、子どもたちは2歳10ヶ月から幼稚園へ通うようになってから、徐々にタイ語が出てくるようになった。

小学校を選ぶ時も、「まず、日本人学校へ通わせる選択肢は最初からなく、タイ（のローカルな学校）でしょうって感じで。今でいうバイリンガル校もインターナショナル校もぜんぜん頭になかったですね」とEさんはいう。そのため、子どものことばに関しても、「まずタイ語でしょう。次に日本語があって、最後に、英語。」と話す。

〈息子Sさん・Kさんの語り〉

では、この頃、子どもたちはどのように生活していたのか。次に子どもの語りを聞いて見よう。

幼少期は、「マンションにいたので、プールもあったし、自転車もしていた。運動は好きな方だった」という。ただし、近所の子どもとは遊ばなかった。タイでは、近所でもみんな違う学校へ行っていたので、子どもたちもバラバラだった。

二人はタイの小学校に入った時はタイ語があまりできず、1年生を2回やったという。「最初に入った1年生の時は、タイ語があんまりできなくて」という。家では、日本語を話していて、「子どもの時好きだったポケモンとかマンガとか、お母さんがずっと本とか（読んでくれて）、テレビとか、ずっと日本語」だった。子どもの頃、タイ語があまりできなかったことは記憶しているが、タイ語で苦労したことはなかったという。「タイにいる限り、タイ語はどんどん入ってきて、勝手にできるようになった」という。子どもの頃は、「タイ語と日本語は区別できずに、ごちゃごちゃになっていた」。母と日本語で話していると、タイ語が混ざる。そのときは、母に直してもらう。母もタイ語がわかるので大丈夫だった、という。

4. 2 その後の子育てと学校生活

再び、Eさんの語りに戻ってみよう。

〈母親Eさんの語り〉

子どもが家庭でEさんと話すとき、タイ語が混じることがあっても、そのことをEさんは受け止めていたという。子どもの話す日本語の中に出てくるタイ語の単語はEさんも理解できた。日本語を間違えてもいいし、タイ語を混ぜてもいい、わからなければ聞けばいいんだと、子どもが安心して母親に話ができるように配慮したという。

一方、Eさんは子どもに日本から取り寄せた教材を与えることも、日本語の文字を教えることもしなかった。ただ、子どもが双子だったので、日本語を使うゲーム、たとえば「人生ゲーム」など、日課のようにやっていたという。また、Eさんは読み聞かせはよくやっていた。子どもが喘息だったこともあり、薬の吸引の間、膝の上に抱いて本を読んであげた。本は、日本人会の子

ども図書館からたくさん借りて来て、寝る前は必ず読んでいた。本の読み聞かせは、子どもが小学校の4年生か5年生になるまでやっていた。字を書く練習はしなかったし、教えなかったが、子どもたちは日本語が読めるようになっていた。日本のビデオを見て、画面の上に出ていた日本語のスーパーを見たりして、ふだんから日本語の文字は目に触れていたという。

また、Eさんは子どもたちを連れ、毎年4月に日本に行き、地元の小学校へ「体験入学」させていた。子どもたちは、1年生から6年生まで6年間、4月に2週間から3週間、母親の地元の小学校へ通い、普通クラスで授業に参加していた。中学校に入学してからは、「体験入学」ができなくなった。それ以後、家庭以外で日本語に触れる機会がなくなったという。しかし、子どもたちは、中学生になってからタイで受験した「日本語能力試験1級」には、二人とも合格した。

では、この頃について、SさんとKさんは、どのように語るのかを聞いてみよう。

〈息子Sさん・Kさんの語り〉

SさんとKさんは、小学校は、ふつうのタイのローカルな小学校へ行った。その学校は日本の学校と交流があって、日本人がその学校に来ると、二人は「通訳」をやらされたが、あまりできなかった。タイ人の友だちは二人を日本語がわかる子と見ていたが、特別な目線では見ていなかったと、二人は思っている。自分から日本語ができることは言わなかったが、タイの友だちは、二人が持っている日本の文房具に注目していて、なぜそんな文房具を持っているのかと聞いて来ることはあった。

二人は、日本の小学校とタイの小学校の違いについて、「タイの方がずっと勉強、勉強みたいな感じで、日本はなんか自由みたいな」印象だったという。日本では、「友だちがみんな近所で、家が隣だったりして、授業が終わって、待っていて、みんなと一緒に帰ってみたいな感じで。友だちの家も自分の家みたいな感じで」。タイでは学校が終わると親が迎えに来てそれぞれ子どもを連れて帰るが、日本ではそのようなこともなく、子どもは自由だった。だから、「楽しかった。スポーツももともと好きだったし、ザリガニ釣りとか、たんぼとか自然も多くて、秘密基地を作って（遊んだ）」。また、「ことばは、全部、日本語。ふたりで日本語がわからず相談するときは、タイ語を使っていた」という。周りの友だちは、自分たちを「タイからきた子」と見ていて、ふつうに接してくれた。名前は、タイの名前ではなく、母親の名字と、タイのニックネームの「S」と「K」（どちらも日本名）を使ったので、友だちは「名前もふつうじゃん、みたいな。タイの名前もあるのかとか聞かれて、教えても、ああそう、と。（日本の友だちは）覚えられない。」と二人は笑って話す。

中学生に入ってからでも日本に行ったが、さまざまな理由から、日本の中学校に「体験入学」はしなかった。

4. 3 中学校から高校、大学へ

Eさんは、中学校から大学へ子どもたちが成長する過程を次のようにいう。

〈母親 E さんの語り〉

子どもたちは、中学校、高校はタイでトップレベルの学校へ進学し、勉強に専念した。理数系が好きで、高度な数学を学んだ。勉強が忙しく、高校時代の外国語は勉強しなくてもいい日本語を選択したこともあった。

その後、子どもたちは、タイのトップの大学の工学部へ入学した。E さんが子育てで唯一後悔しているのは子どもの英語力が伸びなかったことだという。ただ、「日本語とタイ語と英語の3つの言語を学ぶことは子どもにとっては負担があって、もし英語を学んだらここまでタイ語も日本語も伸びなかったと思うようにしている」と話す。のちに、子どもたちが成長してから、子どもから、なぜ自分たちを英語のバイリンガル校に通わせなかったのかと聞かれたこともあったというが、先の理由を述べると子どもたちも納得した様子だったという。

また、日本への留学については、息子たちは日本人として日本の大学へ入学するにはそこまで日本語ができず、かといってタイ人として日本の大学で英語プログラムのある学部などへ入学するには高い英語力が求められる現実があると、E さんは言う。また子どもの将来については、ワーキング・ホリデー・ビザでオーストラリアで働くとか、海外の大学の大学院へ進学することがあってもよいと考えていると、E さんは言う。

では、その頃、S さんと K さんは、どんな思いで生活していたのか、二人の語りを聞いてみよう。

〈息子 S さん・K さんの語り〉

二人は、小学校の時、塾に行ったら成績がよかったので塾の先生に勧められて、タイで一番いい中学校を受験して、入学した。二人は、その中学校では、「理科と数学がすごく好きで、すごくできた方だったので、理系の特別のクラスに入った」という。しかし、中学校では勉強ができていたが、高校に入ると、タイ中から優秀な生徒が入って来ていた。そのような優秀な生徒ばかりで、「もう勝てないなあ」と思ったという。「好きな科目は、数学だけ」だった。また、他の科目、たとえば、生物は、覚えることが多すぎるし、面倒くさいし、数学も普通の高校では教えない大学レベルの内容をやっていたという。そのため、追いつけないと思って、学習意欲が低下したという。

タイ語に問題はなかった。タイ語はすべてわかる。タイにいるので、タイ語は普通だった。中学校や高校の時は、日本語を勉強した機会はなかったが、インターネットで日本の動画を見たり、日本の番組やお笑いが好きなのでそれを見たりしていた。日常では日本語は、母と会話する程度だった。また、

「家に帰る時間が、ちょうど、ニュースの時間で、日本の NHK のニュースを毎日見ていた。」「ちゃんと見なくても、(中略)「日本語が耳に入ってくる。テレビがつけっぱなしみたいな感じだから。」「(読んだり、書いたりは?)」「読むのは漫画とかで、書いたりは、あんまりしない。」「無理やりに、日記、書かされて・・・」(中略)「ほとんどがひらがなで。」「そう、ひらがなで。漢字、書けるのは小1か小2くらいの漢字まで

で。でも[漢字を]読むのはほとんどできる。」「なぜ読めたのかは、わからないけど。」
「日本語のテストを受けるときは、直前に、過去問[題]を見る程度で、特に勉強した
ことはない。」

二人は、中学や高校のとき、自分の母が日本人だということを友だちに特に言わなかった。顔
を見ただけではわからないし、言っても、得もしないし損もしないと思っていた。周りに、父親
が日本人、母親がタイ人の友だちがいたが、その子は、日本語は話せなかった。そういう友だち
と比べると、自分たちは日本語が「すごくできる方だ」「なんでこんなにできるようになったんだ
ろう」と思っていた。でも、それで、「得した気分でもない」。「英語は、悪くはないが、できる方
でもない。」「みんなが出来すぎる。」「英語はアメリカとか行けば1年か2年くらいで、できるよ
うになると思う。」大学を卒業したらどうするのかを尋ねると、「今の考えでは、終わればいい
みたいな感じ。〇〇大学の工学部を出たというだけで、いい。」「(大学を)終わっておけば、就職
は、なんとかできる方だと思います。」就職の際、日本語は役に立つのかを聞くと、「今、日本の
企業が工場出していて、トヨタとかホンダとか、多くあるので、工学部を出て、工場へ行くとき
は、日本語ができると、役に立つと思います。」「いざとなれば、日本に留学して、もっと日本語
を上達して、日本で働ければいい。日本でいっぱい稼いで、タイで遊ぶみたいな・・・」

4. 4 子どもの名前と「しきたり」

〈母親Eさんの語り〉

Eさんに、子どもの命名について伺うと、夫が子どもの誕生日をタイのカレンダーで見て命名
したというが、ニックネームはEさんがSとK(どちらも日本名)とした⁵。夫の母親は中国風に
漢字二文字の名前を孫につけていたが、それはふだん使用していないという。夫のファミリー・
ネームは、夫の両親がタイに移住した時、中国語の名字の音をタイの似た音で表記してタイ人名
らしい名字を「勝手に」作成したという。そのため、タイではその名字は珍しいものだが、中国
語の名前に由来することは誰も気づかないという。Eさんは、子どもの名前に日本の名字の痕跡
を入れることはしなかった。ニックネーム以外に、「日本の名前がない方がいいと考えた。日本人
とわからない方がいいと思う。タイ人ならタイ人として生きていけるように。そこにわざわざ日
本の名前を入れる必要はない」(要約)とEさんは語る。

夫の母親は「月の満ち欠け」で年中動いていく「しきたり」を維持していたという。そのよう
な「しきたり」がわからない嫁は嫌だと思っただけだったので、日本人であるEさんを歓迎してくれ
たという。ただ、今は、夫の母親とは離れて暮らしているので、その「しきたり」の影響はない
し、夫も中国語がわかるわけでもなく、子どもたちも中国語はわからない。かといって、Eさん
自身がタイのことやタイ人としての「あたりまえ」のことをよく知っているわけではないので、
子どもたちがタイ人としての「あたりまえ」を身につけているかはわからないと話す。

5 タイは、正式な名前の他に日常的に使用するニックネームがある。

〈息子 S さん・K さんの語り〉

S さんと K さんは、日本とタイの違いを次のようにいう。

二人は、最近、日本でアルバイトをした経験があるという。大手通販会社の倉庫で、時給 900 円で週 6 日働いた。1 日で稼げる金額はタイでは 1 ヶ月くらい過ごせるくらい金額だという。高校生のときに、奨学金で日本の高校へ留学できる機会があったが、その奨学金を取るために日本の国籍を「捨てる」のはもったいないと、「一応（日本とタイの国籍を）二つ、持っていたかった」という。

また自分たちは、「ふつう。ただ、両方できるって感じ。日本語のできるタイの方が、数が少ないんじゃないか。だから、タイ語のできる日本人より、得するんじゃないか」と考えていると話す。一方、日本の仕事や環境はタイとは異なるという。たとえば、「タイでは、何でも大丈夫、大丈夫みたいな感じ、時間に遅れるのもふつうに遅れてくるし、ドタキャンもふつうにありますし。日本では、（中略）日本人の性格からして、それはしないし・・・。」という。最後に、S さんと K さんは、母の E さんについて次のように言った。

「(母は) いいですね。いろんなことできて。良いすぎる時もある。気、使いすぎる時もある。たとえば、友だちが泊まりにくるとき、ぜんぶ布団とかも用意して。(中略) そんなことしなくてもいい。ここは、タイだから誰も気にしないって。部屋が汚くても・・・そんなことを(母は) 気にしちゃうんですよ。」

4. 5 考察(1) 母と子どもの「移動とことば」の軌跡

E さんと息子たちの語りを、「移動とことば」を視点に見てみると、どうなるか。

①空間と言語間の移動

母親の E さんはアメリカ留学経験を持つ。夫の両親は中国からタイへ移住した家族で、夫は中国語を聞いて育った「移動する家族」(川上, 2013) である。夫もアメリカ留学の経験を持つ。E さんは息子たちの小学校時代は、毎年、日本に行っている。それ以後は不定期であるが、今も、日本とタイの間の移動を繰り返している。息子たちもこの間、日本とタイの間を移動し続けている。

言語面では、E さんはタイに移住してから、本格的にタイ語を学び、現地の言葉がわかってから出産した。家では日本語を使って子育てをしてきたが、タイ人として成長してほしいと思っていた。母子は、日常的に、タイ語と日本語の間を移動し続けている。

②言語教育カテゴリー間の移動

息子たちは、短期間だが、小学校の 6 年間、タイ語の学校から日本語で学ぶ学校へ移動を繰り返した。その間、息子たちは日本語でコミュニケーションをとりながら、タイと日本の「学校文化」の違いを経験した。高校で日本に留学するという「言語教育カテゴリー間の移動」を考えたとき、二つの国籍を保持する方を選択した。実際に移動を経験したわけではないが、日本留学を考えたことを記憶している。

5. 事例(2) Aさんと息子のBさん

次にタイ人男性と結婚したAさんのケースを見てみよう。Aさんはタイで二人の子ども(娘と息子)を育てて来た。すでにタイに30年間暮らしている。Aさんはその夫と日本で出会った。夫はタイで高校を卒業した後、日本に行き、日本の大学と大学院で7年間学んだので、日本語が堪能である。そのため、Aさんがタイで暮らすようになってからも、Aさんの家族の家庭内言語は日本語であるという。夫はタイで生まれたが、夫の両親は中国からの移民であった。そのため、嫁となるAさんは、「漢字のわかる日本人でよかった」と歓迎されたという。

5.1 子育てと幼少期

〈母親Aさんの語り〉

Aさんはタイで出産後、タイに住む「先輩」の日本人妻から経験を聞くことがあった。ある親子はタイ語が中心になり、子どもは日本語が話せなくなったケースや、家庭内で日本語を維持しながら子育てをし、子どもが日本語を話せるケースもあった。そういうのを知って、Aさんは「私自身は、できたら子どもと日本語で喋れたらいいなあと、その時は思っていました。」と語る。

ただ、第一子の娘が3歳で幼稚園に入ると、新しい単語は全部タイ語なので、娘はどんどんタイ語を覚えて、娘の日本語がだんだん「侵食」されていくようにAさんは感じた。やがて、娘は習ってきたタイ語を交えてしか話せなくなった。その時、Aさんは、「(子育ては)結構、むずかしい」と思ったという。娘のもつ日本語の単語数が少なく、その日本語が「あっという間にタイ語になった」という印象だったという。

では、第二子の息子Bさんはどうだったのか。Bさんの語りを聞いてみよう。

〈息子Bさんの語り〉

Bさんは、幼少の頃は、遊ぶのが好きな元気な子だったという。幼稚園に入る前はほとんど日本語、幼稚園に入ってからタイ語になった。タイ語で生活していたが、家の中は日本語だった。両親とは日本語で、姉とはタイ語で話していた。家の中で日本語を使い、「日本の文化も混じっている」が、他はふつうのタイの家族と変わらないと思っていたという。

自分の家と周りの家と違うと思ったことはないかと聞くと、

「あまり何も感じない。学校でもタイ語もふつうにできていたんで、友だちも、別に、私が日本人とは知らなかったんですよ。家では日本語を話しているとか。それも、わからないくらいタイ語ができていたんで、あまり、(違いは)何も感じなかった。」

という。家に遊びに来る友だちは、Bさんが家で日本語を話すのを見て、驚くという。その時は、Bさんはその友だちに、「母が日本人だから日本語できると言っただけ。でも、(当時は)日本語は上手ではなかった。タイ語と比べたら。」ともいう。

5. 2 その後の子育てと学校生活

〈母親 A さんの語り〉

A さんは、娘が小学校 1 年か 2 年生くらいの頃、日本語クラスが立ち上がり、母親として参加するようになった。その後、教室は「バイリンガル教室」⁶として運営されるようになり、2 週間に一回、子どもを連れて、親子でその教室へ通ったという。A さんと同じように、子どもに日本語を教えたいと思う親と知り合ったことがよかったという。

日本人の親がいれば子どもは日本語を話して当然と思う人もいるが、海外で子どもを育てながら、子どもが日本語を話せるようになるのは簡単ではないと、A さんは思う。そのような自分の苦勞をわかってくれる人がいると「救われた」気持ちになるが、逆に、日本に子どもを連れて帰った時、周りの人が子どもに日本語で話しかけても子どもが理解できないとき、「この子は、日本語が下手ね。」と簡単に言われ、がっかりしたこともあったという。

A さんは子どもを育てるときに、子どもは基本的に「タイ人として育てよう」と、夫婦で話し合ったという。A さんはタイ語を覚えながら、子育てした。第 1 子の娘のときは、A さんが日本語で娘にいうと、娘はタイ語で返してくる。そのタイ語を A さんがわからないと、娘に「それは日本語で何ていうの」と聞いたり、娘からタイ語を教わったりしたが、息子が育つときには A さんのタイ語は上達し、タイ語がわかるようになっていたので、息子がタイ語を言っても「日本語で言いなさい」と言わずに、聞き流すことができたという。

家の中では夫も A さんも子どもたちと日本語で話していた。夫は子どもを何語で育てたいとは思っていたわけではなかったが、A さんは子どもたちに日本語がわかるようになってほしいと思っていた。その理由を、A さんは次のようにいう。

「一緒に日本に里帰りする時、私が通訳をするのは絶対嫌だと思っていた。両親と子どもが話すとき私が通訳をしなければならぬと、子どもを置いて外出もできないと思ったことと、私の両親が孫と話が通じないときと（両親は）悲しいと思うし、（A さんの親に対する）親孝行として、普通の会話はできるようにしたいと（いう）、二つの理由です。」

その他に、A さんは子どもたちに、タイの公文をやらせたり絵本の読み聞かせをしたりした。ただ、学校のことが忙しくなり、公文の問題に取り組めなくて母子で喧嘩をしていると、夫に「喧嘩するくらいなら、日本語なんか、やめちまえ」と言われたことがあったという。その頃、A さんは、「何もやらなくて後であの時やっておけばよかったとにならないようにしたいという気持ちもあった」という。ただ、今になってみれば、そこまでして子どもにやらせたことが、意味があったのかどうかかわからないとも、A さんはいう。

また、A さんは、子どもに「日本語を押し付けても、（日本語が）簡単にできるものでもないし。母語のタイ語がしっかりしてないと、どのことばでも自分の意思をうまく伝えられない子に

6 深澤（2013）参照。

なることの方が怖かった」という。

〈息子 B さんの語り〉

では、B さんはその頃、日本語についてどう思っていたのか。

B さんは、小中学校の頃、2 週間に 1 回、「バイリンガル教室」で日本語を勉強していたが、高校になるとその教室へ通うこともなくなったという。その教室について聞くと、「うーん、まあ、楽しかったですね。」「役に立ちましたが、漢字だけは使わないと忘れるので、高校の時は日本語を勉強してなかったので、漢字とかは忘れまして。」と、話題はすぐに漢字学習に移った。

5. 3 中学校から高校、大学へ

息子の B さんは中学校からタイ語と英語で教える私立中学校に進学した。その中学校は、英語の native の先生が教員の半数を占め、英語で数学や理科を教えていた。B さんは中学校の 2 年生の時に、カナダへ一ヶ月間、留学した。その時、自分の英語力が足りないと感じて、中学校 3 年生の時、その中学校を辞めて 4 年制のアメリカンスクールの高校に入学した。その高校を卒業するまで、4 年間、英語で教育を受けた。高校の時は朝早くから授業があり、B さんは毎朝、5 時 20 分のスクールバスで登校した。11 年生からは、学校のそばのアパートを一人で借りて学校へ通った。

〈母親 A さんの語り〉

その頃、母親の A さんは B さんの将来についてどんなことを思っていたのか。

英語だけで学ぶ「インター校」に息子が進学すれば苦勞も多いだろうが、「本人がそれでいいと言っていたので、それでよいかと思った」と A さんは話す。小学校から高校までの時期に母親として A さんが「このまま日本語は上手にならないんだらうなあという不安・・・でも、日本に連れて行って、うちの親族と日本語で話せる程度は（子どもは）日本語を話していたので、これくらいでもいいかと思っていた」。

また、「年に一度か二度日本に行って、子どもたちの「日本語が上手」と言われれば母親として嬉しいが、タイにいて日本語で親と話して通じなくてもあまり問題ではないし、子どもが A さんに言いたいことがあっても通じなければ、夫を通訳として使うこともできるわけで、あまり子どもたちに日本語のことを言っても、「日本語なんか、喋れない」と子どもたちに言われるのも怖いし・・・タイは勉強も大変だし、いつ使うかわからない日本語で苦勞させたくないなあとも思っていた。」(要約) と A さんはいう。

息子の B さんは学校で、友だちが日本語で書かれたゲームなど持ってきて「何て書いてあるか」と尋ねられても、漢字がたくさんあって読めないと、友だちに「日本人なのに、読めないのか」と言われて、B さんは日本語をもっとわかるようになりたいと思うこともあったようだと言っている。そのような経験に加え、B さんの姉が高校の時に 1 年間日本へ留学したこと、さらに、父が日本人で母がタイ人の友だちの女子生徒が 1 年間日本へ留学して日本語が上手になってタイへ帰ってきたのを見て、B さんがショックを受けたことも、B さんが日本の大学へ留学することに

影響したのかもしれないと、母親の A さんいう。

タイの大学にも合格していたが、留学先として選んだ日本の大学は英語プログラムがあり、かつ、奨学金や学費免除などの恩恵があり、タイ人として留学するのに有利だったことも日本留学を決める要素となったという。

〈息子 B さんの語り〉

その頃、B さんはどのように思っていたのか。B さんの語りを聞いてみよう。

小学校の頃から勉強が好きだった B さんは、高校について、「すごく楽しかったです。すごく好きかったです。環境も友だちも英語も先生も全部がなんとなく好きだった。よかった。(なぜ?) 英語で勉強ができることと、文化がアメリカっぽくて、そんなにタイじゃないところがよかった。」という。

その学校の生徒の半分はタイの生徒だった。だから、「タイ人同士では、休み時間などではタイ語で話しても大丈夫だった。休み時間は楽しかった。」という。「勉強も難しかったが、それも楽しかった。それに、タイの学校ではタイのことだけ勉強するとか仏教の授業もあるが、この学校ではもっと世界のことやアメリカのこと、他の仏教とかクリスチャンとか自分が全然知らなかったことばかりだったので、毎日、新しいという感じが楽しかった」(要約)と B さんは語る。

B さんは、母親が語った、高校の頃の同じエピソードを語った。それは、友だちに日本の商品を見せられたとき、B さんが「期待されるほど、日本語はできなかった」ので、友だちから、「なんで日本人なのに、日本語が読めないと言われた」というエピソードだった。そんな時、B さんは、「少し悔しいというか、もっと日本語ができるようになりたいとか、そんな気持ちがあった。」と話す。

ただし、B さんの周りの人は、「日本語が話せることは、いいことだという評価はあったと思う。タイ人も、日本語を学ぶ人も多いし、日本が好きなので、(周りの人は B さんが日本語を話すことを) いいと思っていたと思う。」という。

しかし B さんは、「自慢できるほど日本語ができるわけではないので、あまりそのことをいうことはなかった」が、自分の家の「文化」が違うという意識はあったという。たとえば、日本に行ったりした経験があること。でも、小学校では、そのような自分の背景について特別な感情はなかったし、高校もインター校だったので、いろいろな背景の生徒がいたから、自分が特別という意識はなかったという。

その頃、家で日本語を話していて日本語についてどう思っていたのかを聞くと、「日本語はいつも難しいと思う。特に、漢字とか、文法、敬語は昔、知らなかったし。テレビを見ていてもまったく理解できなかったんで」。また、タイにいて、母と父以外の日本人と話したら、日本語はよくわからなかったという。家では、本やビデオはタイ語だった。日本語のマンガとかも見ていたが、日本語の場合は、わからないことが多かった。その結果、テレビはほとんどタイ語の番組を見ていたという。

だから、高校の時に、タイの大学も合格したが、「やっぱり今、日本語を勉強しないと(これか

らも)できないから」と思って日本への留学を決めたと、Bさんはいう。

5. 4 日本の大学に留学して

〈息子Bさんの語り〉

Bさんが入学した日本の大学は、英語で講義が行われ、世界各地から留学生がやってくる国際色豊かな大学だった。大学の講義は、半分英語、半分日本語で行われた。Bさんは2年間、日本語を勉強するクラスも受けていた。

ところが、1年生の時には、日本語より中国語が役に立ったという。Bさんは、タイの高校にいる時に、選択科目の「外国語」として中国語を4年間教わった。中国語を履修した理由を聞くと、Bさんの父も中国語ができるので、中国語を勉強しようと思ったという。Bさんの父は、中国系移民の両親の中国語を聞いて育った。そのため父も中国語⁷を理解することができた。Bさんも小さい時にその中国語を聞いたことがあったが、あまり理解はできなかったという。Bさんは、高校では北京語の中国語を学んだ。

日本の大学に入学すれば日本語が上達すると思っていた。しかし、「大学1年生の時は中国人の友だちが多かったので、ほとんど毎日中国語を使っていました。なので、1年生の時は中国語に自信がありました。でも、2年生になった時から、あんまり（中国語を）使わなくなって、忙しくなって、そんなに中国人の友だちと遊ぶ時間がなかったので、（中国語を）どんどん忘れて、今は自信がないです。少しはできるけど、昔みたいに何でも読めるとかじゃないです。忘れるので、使わないと。」という。

一方、Bさんは、「中国語が好きだったんですよ。やっぱり、この4個（タイ語、英語、日本語、中国語）の中で、日本語が一番難しいとまだ思っているんですよ。中国語が難しいとよく人がいうんですけど、個人的には中国語の方が簡単」と語る。

5. 5 大学で思う「ことばと自分のこと」

〈息子Bさんの語り〉

高校まで、タイ語、英語、中国語、日本語と学んできたBさんは、「少し、自分は言語が得意じゃないかなあと感じていました。高校の時は。」という。しかし、大学では4言語を話す人はふつうにいた。中には、4言語以上できる人も結構いた。少なくとも3言語はできないと、この大学ではやっていけなかった。だからBさんは「自分は、ぜんぜん普通だった。その大学では。」と話す。

では、今の自分の英語力とタイ語力についてはどうか。Bさんは、「英語には、自信がありません。多分書くとかは、英語が一番得意。」という。高校大学を含めた8年間では、タイ語の授業はなかった。タイ語で学んだのは中学2年生までだった。だから、親は「丁寧なタイ語の文章や上

7 父の両親の中国語は、中国の南方方言の中国語であったという。

級レベルのタイ語は大丈夫か」とBさんに聞くが、Bさんは「大丈夫という自信はまだある」という。なぜなら、高校時代から、メールやチャットはタイ語を使っていたし、今も、毎日使っているし、タイ語のニュースも理解できているし、ニュースの中で理解できないものはないから、大丈夫だと思うという。

では、日本語はどうかと聞くと、「日本語は最後です。話すのも聞くのも書くのも」とBさんは答える。ことばが混ざることあるのかを聞くと、「あります。たまに自然に混ぜます。(家では?) 単語が、これだけはタイ語で出てくるとか、親も理解してくれるので、日本語とタイ語が混ざる。タイ語を混ぜていても気づかない。(中国語や英語が混ざることある?) そこに、中国語や英語は入らない。家庭では、日本語とタイ語が混ざる。日本に行く前は、こんなに日本語がうまくなかったので、タイ語を混ぜるのが多かった。日本に行って、日本語が上達すると、だんだんタイ語が少なくなった。日本語だけで全部話すようになった。」(要約)という。

ただし、Bさんは、自分の日本語にはまだ満足していないし、自信がないという。だから、日本で働きたいと4年生の時に思うようになった。「日本で働けば、環境が日本人しかいないし、毎日、日本語を使わないとダメだから、高校の時の英語のようになるかなあと考えた。」という。「自分の英語ほど、日本語も上手になりたい気持ちがずっとあります。でも、日本語は難しすぎて、覚えても忘れる。でも、日本語は使わないと忘れる。英語は大丈夫。」という。

「働くときも英語は使いたい。日本語は、正直にいうと、使いたくないが、できるようになりたい。英語ほど使えるようになりたい。そのために、日本語をやっている。日本語は好きですが、漢字はすきじゃないですよ。」と話す。

大学では、「タイ人の学生」だった。誰かに聞かれば、「母は日本人」というが、大学には「ハーフ」は多かったので、自分のことで他の人がびっくりすることなかった。ケニアの人と日本人の「ハーフ」とか、いろいろな人がいたので、驚かない。友だちの反応は「ああそうか。」という感じだった。大学はそのような環境だったので、Bさんは、「自分はふつうだなあ」と思ったという。だから、「自分がハーフ」ということは基本的には言わない。

Bさんはすでに日本の会社に就職が決まっていた。就職の面接では、「タイ人としてアピールしていた」という。自分の日本語も他の留学生と同じくらいなので、「日本人の日本語みたい」とは思われなかった。「ふつう」だった。会社側の人は、Bさんがタイ人で日本語ができる人だという見方だったと思うと、Bさんはいう。自分としては、タイ語も英語も日本語(N1を取得)もできる人と見てほしいと、Bさんは思っていた。就職した、東京にある日本の会社でBさんは、「グローバル部署」なので英語も使う。ただ、会社では日本語で苦勞するだろうなあとBさんは思っている。しかし、その会社はタイに進出しているのだから、タイのマーケット・リサーチの分野で将来、Bさんに貢献してほしいと期待しているし、面接の時には自分もその点をアピールしたという。

将来は、もっと勉強するために大学院へ進学することも考えているし、大学時代にスペインでボランティア活動をした経験があるので、ヨーロッパに留学し、スペイン語を学ぶことにも興味

あると話す。

5. 6 考察(2) 母と子どもの「移動とことば」の軌跡

Aさんと息子のBさんの語りを、「移動とことば」を視点に見てみると、どうなるか。

① 空間と言語間の移動

母親のAさんの夫は日本への留学経験を持っている。その夫の両親は中国からタイへ移住した。夫は中国語（中国の南方方言）を聞いて成長した。夫の家族は「移動する家族」である。Aさんは日本からタイへ移住し、タイ語を学びながら、二人の子どもを育てた。Aさんは、子どもはタイ人として育ててほしいと思っていた。家庭内言語は日本語であったが、子どもたちの間にはタイ語が使用された。Aさんも外で働くように、家族はそれぞれがタイ語と日本語の間を日常的に移動し続けている。また、Aさんは子どもを連れて日本に行くこともあり、孫を祖父母に合わせることもあった。

② 言語教育カテゴリー間の移動

息子のBさんは、中学校と高校で、英語による教育を受けた。二週間に一度の「バイリンガル教室」や公文などで日本語を使って学ぶことも体験した。さらに、大学で日本へ留学し、英語、日本語による教育も受けた。その経験がキャリア選択に繋がり、かつ将来はタイで働くことや、海外への大学院留学、スペイン語学習などを語るように、移動し続けている。

6. 「移動する子ども」をめぐる研究主題とは何か

二組の母子の事例から、「複数言語環境で成長する子ども」について何を研究課題とすべきかについて考えてみよう。

事例(1)の母親Eさんは「母国語でない言葉を中途半端に使うのはよくない」と考え、日本語で子どもを育てたいと考えていた。同時に、タイ語を学び、子どもがタイ語を混ぜても受け止めて対応した。学校選びの際には、「まずタイ語でしょう。次に日本語があって、最後に、英語。」と思ったが、毎年、子どもに日本で「体験入学」をさせるために日本に行った。「日本人として日本の大学へ入学するにはそこまで日本語ができず、かといってタイ人として日本の大学で英語プログラムのある学部などへ入学するには高い英語力が求められる現実」に子どもに英語力をつけられなかったことを後悔する。ただし、「もし英語を学んだらここまでタイ語も日本語も伸びなかったと思うようにしている」と振り返る。子どもが小さかった頃の子育ての思いは、子どもが成長するにつれ、変化することを示唆する。

さらに、夫の家族とのつきあいの中で、「しきたり」の違いを経験した。また子ども（夫の母親から見ると孫）の中国名や、夫婦で決めた子どもの名前の他に、日常で使用するニックネームに「日本人らしさ」を込めていることなど、タイに住みながらもYさんの「日本語」「日本」へ思い

がYさんの意味世界を形成していく。

一方、息子たちは、日本での「体験入学」の記憶や日本語能力試験やNHKニュースなどを聞いて成長した経験から、自分たちの理解する「日本語・日本文化の世界」を形成している。同じ背景を持つ友だちに比べ、日本語が「すごくできる方だ」「なんでこんなにできるようになったんだろう」と思う。それらが大学生となってから日本でアルバイトをする発想や母親のもつ「日本人の感覚」を相対化することに繋がっている。さらに、タイで就職する時は、「日本語を話せるタイ人」として売り込みたいが、日本に行ってもっと日本語を上達させたいと発想する。母子の「移動とことば」をめぐる意味世界は、必ずしも同じではなく、移動し続けている。

事例(2)の母親Aさんが子どもに日本語を教えたいと語る理由は、継承日本語教育で語られる理由（「道具的価値」と「情緒的価値」：村中，2010）に通じるが、同時に、子どもが「日本語を喋らない」と拒否することを恐れたり、子どもに負担をかけることに逡巡する気持ち、さらに、夫に「日本語なんか、やめちまえ」と言われるほど子どもの日本語習得に努力したことが「そこまでして子どもにやらせたことが意味があったのか」と今になって思う気持ちもある。

一方、息子のBさんは、自身のカナダへの短期留学、姉の日本への高校留学、友だちの日本留学などがきっかけとなり、英語による教育、日本留学という空間的移動がともなう学びの経験へと展開していく。学校の友だちに「日本人なのに日本語が読めない」と言われた記憶は母子で共有しているが、日本の大学へ留学したのち、一時期、日本語より中国語を使用していた経験や、「日本語は最後です。話すのも聞くのも書くのも」と語り、日本語に自信がなく「自分の英語ほど、日本語も上手になりたい気持ち」を抱きつつ、「タイ語は大丈夫」と答えるBさんの意味世界も、「移動とことば」の軸で動いてきた結果である。

このように二つの事例に見られる、母子の「移動とことば」をめぐる経験と記憶は、当然ながら、同じではなく、母子で異なる意味世界を形成しているように見える。

またどちらの事例からも、子どもの名前や「タイ人」「日本人」に関わる語りが見られる。「タイ人らしい名前」と「日本名」あるいは「中国名」をめぐる思いや、「タイ人として」生きてほしいという親の願いとまなざし、学校の友だちから「日本人なのに」と言われた記憶、日本語や日本の文房具から「ハーフ」とみなされた経験、さらに、高校や大学で日本に留学するときの奨学金を得るための「タイ人」枠と「日本人」枠を考えた経験、日本の小学校では「タイからきた子」で「ふつう」と思われた「日本名」で呼ばれた記憶、日本でアルバイトできる「日本人」や就職するときには「日本語が話せる」ことを売りにする生活戦略などは、親も子どもも知っているのかもしれない。しかし、子どもは確実に、自己の「名乗り」と他者からの「名付け」の間の葛藤（川上，2016）を経験し、それを子どもなりに処理しようとする。戦争時代に使用された日本人に対する蔑称をあだ名としてつけられたことがあると話してくれたSさんとKさんは、そのあだ名に対して「何も気にしない。そう言われて怒る人もいるけど、そんな子の怒る意味、わかんない。」と語ったが、「自分は自分。だから何？」という態度は、日本で活躍する「移動する子ども」の経験者の語りと重なる（川上編，2010）。つまり、自己の「名乗り」と他者からの「名

付け」の間で経験したことは、子どもにとって親と異なる意味世界を作ることになるが、ここにも、「移動とことば」の軸で動いている姿が見える。

また、今回の8人の調査協力者から、日本とタイのパスポートを両方維持する人と、日本の国籍を「無効にする」手続きをする人がいることを伺った。国籍を選ぶことによって失う国籍があり、それに関する思いは当事者にしかわかり得ないものだろう。それをどのように捉え、生きていくかも、その人、その家族の意味世界を形成する。それもまさに、「移動とことば」の軸で動くリアリティであろう。

以上の考察は、「複数言語環境で成長する子ども」の研究において、どのような意味をなすのか。「移動とことば」を視点に母子の語りを分析していくと、第一は、子どもの成長過程に見られる子どもの意識と親の子育て過程に見られる親の意識に動態性が見られるという点である。そして、その意識の動態性は、子どもが大人になっても継続していく。第二は、その意識は、子どもも親も、「移動とことば」にともなう経験とその意味づけによって変化するという点である。第三は、その意識には、子どもも親も、豊かで幸運の思い、喜び、哀しみ、後悔、諦め、義憤など、ポジティブにもネガティブにもなる感情が詰まっている点である。特に、子どもの場合、ことばをめぐる自らの経験と記憶から生まれる「感情」「感覚」「情念」の世界がたちあられる(川上, 2017)。

したがって、これらの3点が含まれる「移動する家族」「移動する子ども」という意味世界をどのように理解するのが新たな研究課題として浮かび上がる。本稿の事例のように、日本語、タイ語、英語、中国語などによる複言語複文化能力を発揮する「複数言語環境で成長する子ども」の生を、「移動とことば」の視点から見ると、その生の軌跡は常に動的であることがわかる。その子どもの動的な複言語複文化能力を、固定的な定住者の評価点、たとえば、日本語の語彙数や学年配当漢字の習熟度、日本国外で親の言語である日本語でどれくらい日記を書いたかといった視点から「評価」することはできないばかりか、ほとんど意味がなくなるだろう。

「移動が常態である」という視点、そして「移動とことば」というバイフォーカルな視点に立ち、「複数言語環境で成長する子ども」の生を捉えることは、これまでの、モノリンガルで一国民国家内の固定的な言語教育観に対して問題提起を行うと同時に、「複数言語環境で成長する子ども」を解放し、かつその親の負担を軽減することにつながるであろう。これこそが、「移動する子ども」学の中心的な研究主題となろう。

参考文献

- 伊豫谷登土翁(編)(2007).『移動から場所を問う——現代移民研究の課題』有信堂.
- 太田裕子(2012).「移動する子ども」は他者との関わりの中でことばとアイデンティティをどのように形成しているか——幼少期より日本で成長したある高校生の事例から『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』3, 25-48.
- 川上郁雄(2011).『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版.

- 川上郁雄 (2013). ことばとアイデンティティ —— 複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える. 宮崎幸江 (編) 『日本に住む多文化の子どもと教育 —— ことばと文化のはざままで生きる』 (pp. 117-144) 上智大学出版.
- 川上郁雄 (2016). ベトナム系日本人 —— 名付けることと名乗ることのあいだで. 駒井洋 (監修)・佐々木てる (編) 『マルチ・エスニック・ジャパニーズ —— ○○系日本人の変革力』 (pp. 168-184) 明石書店.
- 川上郁雄 (2017). 書評 小説に昇華した「移動する子ども」という記憶 —— 温又柔 (2016). 『来福の家』白水社 (U ブックス) 『ジャーナル「移動する子どもたち」 —— ことばの教育を創発する』 8, 29-32.
- 川上郁雄 (編) (2010). 『私も「移動する子ども」だった —— 異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』 くろしお出版.
- 川上郁雄 (編) (2013). 『「移動する子ども」という記憶と力 —— ことばとアイデンティティ』 くろしお出版.
- 小島勝・白土悟・齋藤ひろみ (編) (2016). 『異文化間教育体系 第1巻 異文化間に学ぶ「ひと」の教育』 明石書店.
- 谷口すみ子 (2013). 「移動する子ども」が大人になる時 —— ライフストーリーの語り直しによるアイデンティティの再構築. 川上郁雄 (編) 『「移動する子ども」という記憶と力 —— ことばとアイデンティティ』 (pp. 44-68) くろしお出版.
- 深澤伸子 (2013). 複言語・複文化の子どもの成長を支える教育実践 —— 親が創るタイの活動事例から. 川上郁雄 (編) 『「移動する子ども」という記憶と力 —— ことばとアイデンティティ』 (pp. 194-219) くろしお出版.
- 村中雅子 (2010). 日本人母親は国際児への日本語継承をどのように意味づけているか —— フランス在住の日仏国際家族の場合 『異文化間教育』 31, 61-75.
- Clifford, J. (1997). *Routes: Travel and translation in the late twentieth century*. Cambridge, Mass: Harvard University Press. (クリフォード, J. (2002). 『ルーツ —— 20世紀後期の旅と翻訳』 (毛利嘉孝・有元健・柴山麻妃・島村奈生子・福住廉・遠藤水城〈訳〉月曜社).